

# 道徳科における個別最適な学びを考える

～令和5年6月3日(土) 日本道徳科教育学会シンポジウムに参加して～

2023.06.06 後藤 忠

令和5年度日本道徳科教育学会総会が東京都中野区立令和小学校で開催され、総会後に恒例のシンポジウムが行われた。今回のテーマは「令和の日本型教育」として今注目されている標記の課題である。

シンポジストは、小学校通常学級担任教師、小学校特別支援学級担任教師、中学校通常学級担任教師の3人で、いずれも若々しく、授業実践に裏づけられた提案内容は力強さと頼もしさにあふれていた。

コーディネーターは本会副会長の山本洋校長(荒川区立尾久小学校)、コメンテーターは新文科省初等中等教育局教育課程科教科調査官堀田竜次(ほりたりゅうじ)氏であった。

道徳科におけるICT活用は、すでに学習指導過程の様々な指導段階で様々に試みられ、道徳科の特質からみて十分配慮を要する点などはかなり明らかになってきていると思っている。そうした中でのシンポジウムだったので、大変楽しみにしていた。

その提案内容をキーワードで拾ってみると、「指導案の個別化」、「ICT活用」、「学級経営の充実」、「読み物教材の理解支援」、「傾聴など教師の指導姿勢」などであった。3者3様にそれぞれが「個別最適な学び」についてのアプローチを試みたことはよいのだが、どれも道徳科に特化していないと言うか、他の教科の指導においても同様に当てはまるアプローチではなかったかと思う。それはそれで間違っていないが、道徳科の特質や目標についての問題意識をもっと濃くもつべきだったと思う。「道徳科は何を育てるための授業か」という素朴で根本的な問題についての意識である。そここのところのイメージが具体的でない道徳科に特化した個別最適な学びへのアプローチはゆるいまままで終わってしまうだろう。

シンポジウムの後半で、僭越ながらフロアーから発言させてもらった。それは10年前に参観したO区立O第四小学校での授業風景のことである。授業者のN教諭は優れた教師、優れた道徳教育実践家で、40人近い2年生の児童を相手にその日は「きつねとブドウ」の教材を使って「家族愛」の授業を行った。N教諭の教材提示は臨場感にあふれ、教材の内容が子どもたちの心に染み入っていく様子がよく分かる感動的な授業だった。

ところが、3人の児童だけ教材提示に集中できず、後ろを向いたり、読み物資料を手でぶらぶらと揺すったり、あくびをしたりしていたのが気になった。授業後にそのことをN教諭に尋ねると、いずれも学区域にある児童養護施設から通ってくる子どもだというのである。「なるほど」と思った。体験のないところには道徳の授業は成り立たない。思いやられた体験がない子には思いやりの大切さは理解できない。友達のいない子には赤おこが流した涙の意味が分からない。家族愛に恵まれない子には親の無償の愛は伝わらないのだ。

昨今、コロナ禍の影響で子どもたちの体験不足が深刻な教育問題になっている。「以前に比べ道徳の授業がやりにくくなった」という声も多く聞かれる。道徳科における個別最適な学びへのアプローチは、児童生徒の道徳的体験の質と量の把握・理解から始めるべきではないだろうか。